

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎さて、こうして、荒ぶる神どもを言い向け平らげ和らげ、従わない人どもを退け追い払うて、カムヤマトイハレビコな、畝傍の白檮原（うねびのかしはら）の宮に坐して天の下を治めたもうた。

さあようやく苦しい戦いが終わると、オホクニヌシと同様に、妻求めになる。

◎カムヤマトイハレビコ：神倭伊波礼昆古：初代神武天皇

◎橿原神宮は明治時代に創建された新しい神社だそうだ。次に近所の茨木市五十鈴町：溝咋神社が出てくる。

◎イハレビコは、日向（ひむか）に座した時に妻がおり、二柱の御子もいた。しかし、大君になるとそれにふさわしい后がいなければということで美しいおとめを探しておった。お伴のオホクメが御子に語った。

◎オホクメの語り：語られているのは、いわゆる、三輪山型：神婚神話の典型で、神が女のところに訪れて神の子を孕ませるといふ神話。始祖神話：氏族の起源を語る神話。初代天皇神武の皇后となるイスケヨリヒメの誕生由来譚になっている。初代天皇の后はただの女ではいけないのであり、ここからも、神武天皇条が神話的であるとわかる。いかに神話的とはいえ、うんこをしている姫を下から犯す、スゲエ神様である。

◎三島にミゾクヒという豪族がおった。美しい姫がいた。三輪山のスケベ神がその美しい姫を孕ませた。その方法が、糞をしている姫の下から矢を突いた。たちまち矢がいい男に変わりめでたく娘が生まれた。その娘の名は<マンコヒメ>といったが、いくらなんでもと、ヒメタタラになり、その娘が初代神武の 后になったという。

◎ここに一人のおとめがおります。これを皆は神の御子だと言うております。

皆が、神の御子と言うのには、わけがあります。

三島のミゾクヒの娘、名はセヤダタラヒメ（聖なる矢をたてられた：厠でうんこ中、下から矢を・・・）それはそれは姿かたちのうるわしいおとめごでした。それで、三輪山のオホモノヌシ（かつてオホクニヌシが国造りに悩んでいる時に美保の岬よりついた神）が見惚れてしまい、その美しいおとめが厠で大便秘（くそ）まれる時に、赤く塗った矢に姿を変えまして、その大便秘（くそ）まりをしていた溝を流れ下って厠まで行き、おとめの秀処をぐさりと突き刺したのです。すると、おとめは驚いて立ち上がって慌てふためいたそうです。

それでも根がしっかりしたおとめで、すぐさま秀処を突いた矢を持ち来て、おのれの床のそばに置いておくと、その矢はたちまちうるわしい男に成り変わります、二人はすぐに契りを交わしました。

そのおとめを妻として生ませた子というのが、その名をホトタタライスキヒメと言い、またの名をヒメタタライスケヨリヒメとも申します。このヒメタタラという名は、ホトというのを嫌がって後に改めたそうです。こうしたわけがあるので、皆はこのオホモノヌシが生ませたおとめイスケヨリヒメを、神の御子と呼んでいるのです。

◎ここからは歌が出てくるが、それらのあらすじを・・・。

三輪山のオホモノヌシとミゾクヒの姫との間にできた娘、イスケヨリヒメと他の7人のおとめが、大和：大神神社の付近で遊んでいた。

お伴のオホクメがその姫を見つけ、大君に知らせる歌を、そして大君の返歌。「おお 可愛いおとめ 契ろう」次に、お伴のオホクメと姫との歌が。お伴が代理で求婚の歌をうたう、姫が歌で返すすぐれた能力がある、姫も即座に応える、求婚を受ける。

◎歌垣：男女が野山に集まり、歌を詠みあって求婚する習俗。歌垣を彷彿されるという意見がネットで。

◎暑い熱い、とにかくあつい、なんだこれは、・・・この何日間のぼやき節である。

◎気象庁の公式見解をひらってみた。

大気中に温室効果ガスと呼ばれるものが増え、宇宙に出ていく熱を閉じ込めてしまい、放出されない。

日本の年平均気温は、様々な変動を繰り返しながら上昇している。100年あたり1.35度上昇している。特に1990年以降、高温となる年が頻出（ひんしゅつ）している。

猛暑の主要因は、太平洋高気圧が強烈に強まり、日本列島に張り出した。フィリピン海海面水温上昇、例年より北を流れる偏西風が上空に温かい空気をもたらす。

フィリピン海で台風などの低気圧の活動が強まった。

温暖化のいちばんの原因は二酸化炭素。化石燃料の燃焼により排出される二酸化炭素の量が多い。

地球温暖化はないという意見。温暖化と二酸化炭素の因果関係がわからない。大寒波や大雪が増えている。

◎河原にはほとんど毎日来ている。7月の下旬から猛暑がやって来た。今までの午後2時や3時には暑すぎる、夕方の陽が落ちる時間帯、4時や5時にしかも土手が太陽を遮ってくれる場所がいい、なんて探して今までと違い安威川右岸を山の方に向かって走るようにしている。二日ほどは晩飯前に走っていたが、それ以降は晩飯後の6時や7時に家を出て河原にきている。今の季節6時半ごろに河川敷に入るとまだまだ明るい、犬の散歩やジョギングやと人もたくさんいる。

◎アトリエの温度計は37度ぐらいだったが、二日前から38度になりだした。35度を超えるともう何もする気が起きなく、アトリエの床でひっくり返っている。今日はなんだか雲が多い、温度計は37度を指しているが湿度がちょっと高いと思っていた。3時頃からぼつりぼつりと来た。乾ききった洗濯物を入れながら、「もっと景気良く降って欲しいものだ これぐらいのお湿りではいやだねえ」と思っていた。しばらくして雨脚が少し強くなりだした、「おお いい感じだね」と喜んでいて。風が吹いてきた、しかも涼しい風だ、これはありがたい。少しずつ雨脚が強くなり、雨が部屋に入るので風が吹きこむ側の窓ガラスを閉めた。降り始めて1時間ぐらい経った頃にはバシャバシャの降り、アトリエのガラス戸を締め切ったが温度計が3度も下がっていた。ピカッと、グシャッと、ガラガラと、雷の音が鳴りだした。ピカッと来て、カッシッシャシ、強烈な雷が二度ほどあった。5時過ぎには雨脚もゆるくなり、空も明るくなってきた。

◎こんなジャジャ降りは山ではつらい。5日ほど先に南アルプスの北沢峠を予定しているが、天気予報がおもしろくない、傘マークが取れない。60歳代に澤山さんと北ノ俣避難小屋に2泊して、雲ノ平あたりをうろうろした。オレは雲ノ平でテント泊もしたのを思い出した、その時雷鳥を見たのも思い出した。帰途、北ノ俣を下っている時にポツリポツリから今日のような雨が降り出した。慌て雨具の上下、ザックのカバーなどをして歩き出した。テント、シュラフが入ったザックはなかなか重い、素早く動けない、ジャジャ降りの雨の中全身ずぶ濡れになりながら避難小屋までの1時間ちょっと歩いた。まだ80リッターを担いでいた頃だ。

◎「若いころはもっと涼しかった 35度を超えるような日は少なかった」「そうだねえ とにかく暑いねえ」と相槌を打ちながら、オレ達がジジイになって、身体が熱く感じるだけか、体力がついていかないだけか、と思いネットで大阪の気温を検索してみると、50年前に比べ平均気温が2度ほど上がっている。「たった2度なのか」「えええ 2度も」なのかこの感覚もわからない。

◎薄暗くなっていく河原、今日は2時間ほどの大雨で安威川の水嵩が増え泥で濁り急流になっている。ダムができその水量が多いのか少ないのかわかりづらくなった。ゴイサギもいるのか、白いサギ、アオサギが暗い夜空を羽ばたいて去っていく。鳥は夜は見えない、じゃないのかね。いえいえ鳥も暗いながらに見えるのだ。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎<その美しいおとめが厠で大便（くそ）まれる時に>これは先生の口語訳だけれど、弥生時代の言葉、「かわやで くそまれる」このように使っていたのだろうか。今の日本語で立派に通用する言い回しに驚いた。

◎三輪山のオホモノヌシとミゾクヒの姫との間にできた神の子、イスケヨリヒメと他の7人のおとめが、大和：大神神社の付近で遊んでいたのを、お供のオホクメを見つけ、歌でもって知らせた。そして大君も返した。

やまとの たかさじのを	やまとの 高佐土野を
ななゆく をとめども	七たりで連れ立つ おとめたち
たれをしまかむ	そのなかの誰と共寝をしましょうか

かつがつも いやさきだてる	ともかくにも まっさきに立つ
えをしまかむ	かわいいおとめと枕を交わそう

◎オホクメが大君の言葉を姫に伝えると、刺青の入った怪しい輩がと、ヒメがなぞかけの歌をよこしたので、オホクメが返した。謎とは4羽の鳥が出てくる。アメドリ・ツツドリ・チドリ・ホオジロ。刺青をしたオホクメの目の比喻であり、謎がとけなければ結婚できない。

◎墨を入れた：入れ墨：古代の入れ墨は賤民階級のものが多く、オホクメは戦闘集団の祖であった。

◎縄文模様と入れ墨：ネットを見ていて、縄文土器の模様と入れ墨に行きあたった。縄文、縄を転がし模様にしたというが、自由自在な線、自在なゆえにどこまで行き、どこで止まり、どこで曲がる、曖昧な言い方だがその模様の成り立ちがわからなかった。顔があり、蛇があり、獣や鳥、これらの具象の横に形と形の不思議、これを平面に持っていき、絵として解決すれば開けるかもと不思議な感覚に襲われた。

あめつつ ちどりましとと	アメドリ、ツツドリ、チドリ、シシドリ
などさけるとめ	どうしてなの あなたの裂けた鋭い目

おとめに ただにあはむと	愛しいおとめに すぐ会いたくて
わがさけるとめ	わたしの裂けた鋭い目

◎オホクメの返し歌を聞いて、おとめはすぐに、「お仕えいたします」と申しあげた。イスケヨリヒメの家は狭井河（桜井市：三輪山のオホモノヌシの近く）のほとりにあって、大君は出かけ一夜の共寝を楽しんだ。イスケヨリヒメは大君の住まう白檮原の宮に入った。歌はこの時の一夜の契りを懐かしんだ大君の歌。

あしはらの しけしきをやに	葦茂る原の
すがたたみ いやさや敷きて	菅のたたみを 清らかに敷き重ね
わがふたり寝し	わが二人でともに寝たおり

◎このあとはカムヤマトイハレビコの大君は亡くなってしまふ。このあっさりの死、即位後、結婚以外の話は、語られていない。

◎カムヤマトイハレビコの大君が亡くなると、御子たちの中で、腹違いのタギシミミは、大君の後イスケヨリヒメをおのれの妻にして、イスケヨリヒメが生んだ三柱の弟たちを殺そうと謀っておった。

◎先代の王の後を手に入れることは、王位の継承権を手に入れる。妃は財産であり宗教的パワーもあった。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎はじめて大君になった天つ神の御子、カムヤマトイハレビコの御歳は、一百あまり三十あまり七歳だった。(ももとせあまりみそとせあまりなたとせ) 御陵は(みはか) 畝傍山北の方(かた) 白檮の尾根のほりにある。

◎ここで、親子関係、夫婦関係、その時間関係をわからなくなり、振り返った。もっともこれは神話なので、あまり説明を追求しない方がいいかも、であるが、大まかには次のようである。

◎カムヤマトイハレビコの大君は九州の日向(ひむか)にいる時すでに、九州の女性との間に、二柱の御子(タギシミミも含め)がいた。

次に、大君と、后；イスケヨリヒメの間に三柱の御子が産まれた。

大君が亡くなると、九州で生まれた大君の子：タギシミミが、大君の後：イスケヨリヒメをおのれの妻にした。

そして、イスケヨリヒメの生んだ子らを殺そうと企んだ。

◎二代目からすでに、日嗣の争いが始まっていたのだ。ヒメは正式の後とはいえ、腹違いの兄としては、「大君になりたい 弟たちに譲ってなるものか 殺してでも大君の地位を手に入れたい」と思うのも当然。そのために、前の大君の後：古女房を妻にしたのだ。

◎大君の後；イスケヨリヒメは、大君が亡くなった今、大君の御子：の妻になっている。夫が恋しいか、自分の子が恋しいか。自分の子を、今の夫に殺されては嫌だ。(ライオンの子殺しを思い出す：ライオンは子を育てているメスに近寄り、その子を殺して、自分の子を産ませようと生殖活動をする)

◎今は夫であるタギシミミの謀りごとを知らせようと歌を作った。この二首は普通の叙景歌に見えるが、全体が暗喩になっている。歌は呪力を持つ言葉、異変を伝えることができる。

さいがわよ くも立ちわたり 狭井河の方より 雲が立ち渡りきて  
うねびやま このはさやぎぬ 畝傍山では 木の葉がざわめいている  
かぜ吹かむとす 今にも風が吹き出しそう

うねびやま ひるはくもとい 畝傍山は 昼は雲が棚引いて  
ゆふされば かぜ吹かむとそ タベに到れば 風が吹こうとしてなのか  
このはさやげる 木の葉がすごくざわめいて

◎御子たちはその歌を聞いて、悪巧みを知ると驚いて、すぐさまタギシミミを殺そうとしたときに、カムヌナカハミミが兄のカムヤイミミに、

「おにいさま あなたが太刀をもって忍び込み タギシミミを 殺してください」

そこで兄は、太刀を手に忍び込んでタギシミミを殺そうとしたが、いざというときには手足がぶるぶる震え、殺すことができなかった。

すると、そばにいた弟のカムヌナカハミミは、その兄の手にした太刀を乞い取って、忍び込んでいったかと思うとタギシミミを殺してしまった。その勇ましい振る舞いを称え、名をタケヌナカハミミというようになった。

◎兄は、弟に、日継の位を譲ろうとして、

「われは 仇を殺すことができなかった 兄であるが 上に立つべきでない そなたが上となり 天の下を治めなされ われはそなたを 扶けて 神を祀る者として お仕えしよう」

◎弟は名を改めタケヌナカハミミとなり、カムヤマトイハレビコの跡を継いで天の下を治めることになった。

◎タケヌナカハミミは二代目天皇：綏靖(神武に続いて：すいぜい) 漢字の二字の呼び名は80末以降のことで、記紀には出てこない。

◎「金剛山 涼しいから 行かない」と誘われて行った。「軽〜く 1時間ぐらいの 登り」「ほおお そんなに簡単な 山なのか」と行ってみた。夏バテの今、「え こらあ きつい」と驚いた。ふうふう言いながら歩いた。何度か来ていると思ったが全く記憶にない。かつて、40歳前後のころ、身障者登山の会で登って下ったような気がするが、何処をどう歩いたか定かでない。「簡単な ハイキングの山だな」そう思っていた。

◎金剛山という名前は、てっぺんにあるお寺“転法輪寺”真言密教の山号が金剛山と言った。元来は全体を葛城山脈と言い、ここだけを金剛山と呼ぶらしい。1120M 大阪で一番高い山らしい。

◎「葛城家歴代御廟所」これは古事記に出てくる豪族：葛城氏の墓らしい。葛城氏の本流は葛城地域を本拠として、5世紀後半に滅亡してしまう。蘇我氏は葛城氏の末裔らしい、6.7世紀にヤマト政権で権力を振るい、その末裔が藤原氏である。

◎1時間ちょっとの山、なんていうけれど、急斜面をひ〜ひ〜言って上がっていく、ここは短距離競技の山である。そういえば、よその山は2時間3時間かけて登り、てっぺんだと喜んでいるが、ここは往復2,3時間で何度も登っている人が多い山らしい。水のそば、「意外ときれいな水だ」と驚かされる。「金剛山は 10度低い」なるほど涼しい、調べると近隣の1000M級はおおよそ10度ぐらい低くそうだが、愛宕山だけは5度しか低くない、というのはなんだろうね、不思議な現象である。

◎「福田さん 3月に 亡くなってたん やて」と家族から聞いた。今年の初め、それこそ2月、3月ころに電話があって、「いろいろ治療したが ガンが小さくならない 医者に 何 やってんだ 嫌味言ってやった」「あと どれぐらいと 聞くに 3週間かも と いわれた」それを聞いて、「福田さん 医者に 匙投げられたのか」と寂しく思った。今の時代、ガンは死ぬ病気ではなくなった、と思っていた、早期の発見で治るものだと思っていた。死がそんなに早かったのか、医者の言った通り、余命3週間があたっていたのかもしれないと驚いた。1年ぐらい前に他の病気で検査した折見つかり、すい臓がん治療に集中しようということになったと聞いていた。どこの施設に居るのかも聞いていたが、行かなかった、というより行けなかった。

◎福田さんとの思い出での圧巻は赤岳登山だ。ひとつ歳下の彼と赤岳に行ったのは60歳代、温かい季節だった。「ここは クラウンなんて 一台も 止まってないね」上等のレクサスに乗せてもらい美濃戸口から奥の駐車場まで入った。うんうん言いながら重い荷をもって赤岳鉱泉のテント場まで歩いた。彼とは二泊、狭いテントで寝泊まりした。テント場までのコースタイムは2時間強の道、3時間ほどかけて歩いた。二日目に赤岳を、三日目は硫黄岳を登って、風呂を探して帰阪した。赤岳には、行者小屋まで森林帯のデコボコを抜け、しばらく行くと岩が表れる、でっかい山が目の前に見える、じわりじわり登って行き、最後の岩場は慎重によじ登っていく。狭いてっぺんに立った時には、「おお やった」と二人で喜び合った。学生時代に空手をやっていた彼は、頑健な肉体を持っていた、少々の登りぐらい根性で登り切った。まったく山とは無縁の方が、名峰赤岳の岩の上に立った、すごいねえ。当時、オレも彼も無類の酒好き、テントに帰っての怪気炎は言うまでもない。ただ当時は写真を撮っていなかった、あったとは思わが残っていない、ま、いいか。残念な人を失くした。

◎この陽気、灼熱がいつまで続くやら、日々不快のかぎり。どこにいても火のそばにいるように熱い。河原はね、夜に走っている。晩飯を食い河川敷に入るのは7時頃、だんだん陽の入りが早くなり、7時半ごろになると暗くなる。昼間の暑さはやわらぎ、涼しくはないがなんとか運動ができるかなと喜んで川上に向かっていく。

- ◎白山の麓のキャンプ場を2泊予約して、一日で白山を往復するというスタイルの山行である。8月は山が混みあう時期、行った先、満員で動きが取れないなんてことになって困る、車の駐車場所、オレの寝る場所、そんなこんなを確保しておかないと情けないことになる。平瀬道から登ると決めたが、登山口付近での勝手なテントは禁止しますと注意書きがある。探して、さくら街道白川郷ひらせ温泉キャンプサイトを予約した、4人で8000円である。「食料も買っておくよ」なんて言ってしまって、前日は何度も買い物に走り、「食担はオレにはあわないね」とつくづく反省。一日目は牛肉と白ネギを好き焼き風に煮るということで決め、二日目はスパゲティにタレをかけるということで決め買い物に走った。
- ◎真鍋、町井、三宅、岡村の4人。三宅さんが7時に我が家に来て車を置き、岡村車で出発、関目で真鍋さんを乗せ、難波で町井さんを乗せ、湊町ICで阪神高速、東大阪で近畿道、門真で第二京阪、京滋バイパス、瀬田で名神高速、一宮で東海北陸道、荘川ICで降り、平瀬登山口に向かうという行程である。このややこしい高速のはしごは何度も口で反復して覚え込んだという笑い話。通行料の計算もこれまたややこしい。
- ◎日々の異常な暑さに身体がまいっている、夏バテなど知らなかったオレだけれど、今年はきつい、「白山も 室堂あたり 台地のあたりの 散策かな」と決めていた。
- ◎一日目は移動日、大阪から岐阜の白川あたりへ向かう。ひるがの高原で昼食：カツカレー1000円を喰ったが、「えええ 暑い熱い」標高1000M ぐらいのここも陽差しがじりじり大阪とさほど変わらない。すぐの荘川ICで降り、足りないものをちょっと買おうと、店を探した。「すぐだよ なんでも売ってるよ」「田舎のすぐは 遠いね この10分は 歩きゃ 1時間で来れないよ」郡上の街まで走った。そこからキャンプ場まで北に向かって、白川、砺波方面に向かいこれまたどんどん走った。キャンプ場に着き2泊4張4人で8000円を払った。「ここがいい いやいやあそこがいい」盆明けの今日はほとんど人がいない。川のそばの大きな樹が何本もあるところで荷を下ろしテントを張った。標高500Mのここは同じく熱い。海水パンツを持っていたので、横の河の水の中に座り冷たい水を身体にかけたのはいたく気持ちがいい。
- ◎明日は早朝、暗いうちに出発なので登山口を見ておきたいと、平瀬登山口まで車を走らせた。すぐそばに“三方崩山：さんほうくずれ山：大正時代の地震で3か所が崩れたのか、白山に住んでいた天狗の爪痕という伝説も”その登山口がある。細い道を20分ほど白山方向に向かった、盆の最後の日の夕方、降りてきた人たちの帰る車と何台もすれ違った。登山口を確認し、「どうせなら ここで 浸かろう」と皆さん露天風呂に入られた。20年も前かここで車中泊した時に不思議な滝を見たことがあるかと探したが、「何かまちがえているのでは」と不思議に思っていたが、帰ってサイトを見ると少し離れた場所にその滝はあった。
- ◎笑い話：オレの車、去年11年前の中古車を60万円で買った。ガソリン車なのでクーラーを入れるとガソリンの消費量がすごい、かつてのアコードなみにガソリンが減っていく。それはいいのだが車の開け閉めの話。ずっと、キーに付いているボタンを押して開け閉めをしていた。「開ける時は ドア取っ手を触ると 自然と開くことができるよ」「へええ そうなんだ」とその方法で開けていたが、閉める時は相変わらずキーのボタンを押していた。「いちいち キーを取り出し 閉めなければ なにか方法あるのでは」とうっすら思いながらもキーを取り出しボタンを押していた。「車を閉める時は 取っ手の ここを 押すの」「えええ へえ〜」なんと、「車の 取っ手に付いているボタンを 押すと 車のドアは ロックするのだ」と感激である。ただ最後に大変なことをしてしまった。二日目テントから起き上がって、身体がだるい、疲れ切っている、睡眠不足と昨夜の酒、ぼお〜としていた。いざ出発という時にハンドルを切ってガリガリ音に慌て車を止めたが、左側に大きなコンクリートがあった。降りてみると大きなへこみ、痛恨の極み、おおいに残念、情けない。
- ◎登山口の下見が終わり、さあ帰ろうと5分ほど走らせたところで、「あ」と奇声、「スマホを忘れた 風呂だ」という。慌て引き返しよくよく探してみると、お店にスマホが届けられていた。風呂代の500円はカンカンに入れてくれと書いてあったので、100円じゃなくちゃんと500円入れた、そのご利益だとおおいにご満悦。5時半にテント場に帰り、「さあ ビール」と乾杯をして夕飯を喰った。

- ◎4時45分に起きた。この時間、やっと明るくなりかけてきたという感じ、湯を沸かし、行動のお茶を作り、テルモスにヌードル用の湯を詰め、コーヒーを飲んで、パンをいくつか喰った。
- ◎白山は大昔、信仰の山として登られてきた、修験者や参拝者が、加賀・越前・美濃の三つの禅定道を登った。越前禅定同は白山平泉寺をスタートするらしい。昔この寺に寄ったことがある、白山振興の拠点として栄えたが、1574年一向一揆の焼きうちにあい消失全滅してしまった。最近掘り起こされ中世の石畳などのりっぱな遺構が見られる、これはなかなかすごいものだと感激した。このコースは三つのうちでは一番短いいはいえ、2.3日もかかりうんざりする長さ、今は寸断されているようだ。美濃禅定道は何度か行ったことがある、石徹白方面から入る道のような。加賀禅定道は手取川流域から登るようだ。
- ◎6時頃に昨日確認しておいた登山口から歩きだした。3時間足らずで大倉山避難小屋までやって来た。コースタイムより少し早いようになかなか優秀だが、オレは相当ばてている、夏バテである。大倉山避難小屋は現在大規模改修工事中、入り口には鍵がかけられ鉄パイプの足場が組み上がっている。工事の出来上がり時期は不明となっている。今回は日帰り白山登山、帰るときにこの現場に3人の大工さんが屋根に壁に取り付いて作業をしていた。「ご苦労様」声をかけ通り過ぎた。大きなザックが置いてあるので彼らもここまで登ってきたようで、資材は横の広場にへりで降ろしているようだ。登って何日か泊まりながらの作業だろうと想像するが、早く出来上がりますように。
- ◎歩きながら、うんこ文化論が聞こえる。「私 いまだに トイレットペーパーを 揉む」「パリは汚かったんだよ 江戸時代の日本は まだ清潔だ」歩きながら樹林帯の途切れたところ、白山の異様な姿があちこちに見渡せる。白い太い樹の幹がによきによきくねくね、なんの樹なのか、でっかくてかっこいいねえ。大きく崩れた跡がある、先ほどの崩れ山もまさに大怪獣の爪痕だ。ダム湖が下に見える、今の時間、陽が隠れ曇り気味の空模様風は涼しい、雨は降りそうにない、降ったら、やだもんね。
- ◎もう少しで室堂というあたりでばててきた、こんなところでばてては情けないねと思いつつ、ゆっくり歩いた。オレの好きな室堂の下、その台地、背丈ぐらいの緑が広がり、横には白山のてっぺんが見える。カールには雪が残っている。人の背丈ぐらいにハイ松が茂る、向こうが見えるか見えないか、その先を小鳥が先導してくれる、パット跳び地面に、ひよっと跳び小枝に、そしていなくなった。先ほどまでのハ～は～登り長そでシャツが汗で濡れていたが、登りが無くなり平らな台地、涼しい風が吹き心地がいい。10日前にも来た人が、「ちょっと前はお花畑だったよ」というが今でもたくさんの花が咲いている、白、黄、紫、赤、ピンク、なかなか賑やかじゃないか。
- ◎室堂にはたくさんの人が休んでいる、「お宮さんの 山だね」そう思わせる建物、鳥居、神主さんと巫女さんたち、「池だけでも 見ようか」と歩き出した。てっぺんから少しそれて左の方へ、先ほどのバテバテが少し軽くなりえちら登りだした。「なんだ 結局 登るんだ」といささか騙された感じだけれどゆっくり登っていく。加賀禅定道と標識に書いてあるが、目的はすぐその池である。火山の火口跡だろう、ボカ～んと小爆発があつて穴が開く、ビル一個ぐらいの体積、直径が20メートルかな50メートルかな、大きさ感覚がつかめないうが、汚い水に雪が半分残っている。元気ならあの雪のところまで行のだが、上でそっと見てそっと引き返した。このあたりは小爆発が何度も起こり、池が3個ぐらいあるのかな、いまだに煙が出ているのかな。前に来た時にスコップを持ったあんちゃん、火山の研究者らしいが、「ちょっと 穴を掘りに・・・」と向こうの方に行った。白山はいまだに噴火の可能性のある活火山のひとつだそう、噴火は、400年前500年前に起きている。
- ◎なんと電話がかかってきた、「もうすぐ室堂に帰り着くよ」「3人はビール飲んでるよ」こんな所での電話はいささか興ざめである、よっころしよ。
- ◎77・75・74・73 こんな年のジジババが平瀬道を往復して帰ってきた、しかもほとんどコースタイム、夏の暑い時期に楽しい登山であった。
- ◎朝起きたら、テントの天井にカマキリがいた、「彼も怖かったんじゃないの」笑いである。

◎先日平瀬登山口から白山に登った折、横に三か所大きく崩れた山があった。山の名はそのままに“三方崩山” “さんぼうくずれやま”と読む。2000M級の山の山腹を上から下まで大きく崖崩れがある、遠くから見ればただの景色だが、崩落した土砂の量はすごいものだろうと想像する。1585年の白山大地震の際に山頂から麓までごそり崩壊したものらしいが、昔白山に住む天狗の爪痕という伝説もある。遠くから見るとまだまだ土が新しい、最近の崩壊かと思うぐらいに生々しくその現場は土が露出している、樹々が育っていない、500年足らずの時間があるのに樹々が生えてこないのは不思議だ。

◎岐阜県白川村、合掌造りの民家で有名な場所、昔来たことがあるはずだと思いつつ、食料を買いにAコープ白川に近づくとガードマンに止められその奥には一般車は入れないという規制がされている。今回の登山口には荘川から入ったが、白川からも近い。

◎1500人が一瞬に消えたホラー動画を見つけた人がいた。「それは何」と調べわかったことは、帰雲城址というものに出会った。帰雲城(かえりくもじょう：三方崩山の下に在った)は当地の武将：内ノ島氏の城であった。1585年1月18日の地震で、家300軒以上、圧死者500人以上とされる。いまだにその場所は特定されていない。また最近になって埋蔵金伝説が湧きあがり興味本位に語られているとか・・・。

#### ◎かえりくも城の名医：昔話

400年余りも昔のこと、戦国時代も終わりに近い天正年間に、白川郷保木脇(ほきわき)は、帰雲城の城下町として、それはそれは賑わっておりました。殿さまは、内ヶ島氏理(うじがしまうじよし)といい、飛驒の西部に勢いをふるい、南は郡上の白鳥、北は越中の砺波まで領地がありました。帰雲城の盛んなことは、空を流れる雲も、帰雲山にかかると、その勢いをおそれて引き返すほどでした。

城下に一人の医者が住んでいた。殿さまに仕える医者でしたが、貧しい村人も診る腕の良い人でした。いつものように城に入り、まずは殿さまの脈を診ました。殿さまの身体は異常がないのに脈がない、命の終わりに近い人の“死に脈”でした。急いで奥方や、城にいる全部の脈を診ましたが“死に脈”になっている。城下の人々も、自身も、猫や馬まで、同じ“死に脈”になっている。

これははいよいよ大災害が起こると不安が大きく強まり、皆に、「城下から逃げなさい」と叫んだが誰も信じてくれない。医者は家族を伴い白川街道を北に向かったのです。萩町に着き人々の脈を診ると普通でした。

突然天地がひっくり返るような大きな音と共に、大地震が起きました。白山あたりに怪しい雲がわき起り、山は鳴り、地響きはすごく、大地は揺れ動き、生きた心地がしなかった。

その後、医者もその子孫らも明治まで萩町に住んだ

◎大災害の話、一瞬にしてたくさんの人が無くなってしまふ、これを聞いて思い出すのがいくつかある。

◎ポンペイ：二十歳代にポンペイ遺跡の存在を知った、これはすごい、すごいものが出てきたものだどびっくりした。西暦79年ベスビオ火山噴火による火砕流で埋め尽くされた街、そこを発掘して出てくるでてる街の姿のいろいろ、これは圧巻である。亡くなった人のまわりを溶岩が襲い流れきた。2000年近い月日が経ってその空洞に石膏を流してみると、なんと人の形がそのまま出てくるではないか、これはすごい。人口が2万人以上の古代都市が一瞬にして熱い溶岩に埋もれ、18世紀になって発掘された。

◎鬼界カルデラ：以前、縄文人の話を読んでいてこの大噴火を知った。今でも外輪山の一部である硫黄島から煙が出ている。カルデラを作るような超巨大噴火は日本で過去15万年に14回起きている。一番大きいのは9万年前の阿蘇カルデラだそう。最も新しいのが7300年前の鬼界カルデラ。過去1万年で世界でも最高規模の噴火だそう。南九州の縄文人が全滅したといわれるが、当時の縄文人の人口がどれぐらいなのか見当がつかないが、ポンペイの桁違いの大きさの大噴火、生き物のほとんどが全滅だね。

三浦博之著<口語訳：古事記>

◎先生：カムヤマトイハレビコ（初代神武）は、一百あまり三十あまり七歳、137歳はずいぶん長寿だが、次第に人間の寿命に近づいてきている。事績（在任中の活躍）が何も語られていないのは、仮構された天皇だからである。なお、2～9代の天皇たちも系譜だけが伝えられており、欠史八代と呼ばれている。これらの天皇も、天皇家の歴史を長くするため後に加えられたものである。神武陵は幕末期に、ミサンザイと呼ばれていた円墳を御陵と決め、明治以降も改修を重ね現在のよう立派なものになった。

◎第二代から第九代まで、欠史八代の天皇は、実在性のほとんどない天皇である。先生が言うように、だらだら眠くなるように書かれている。どこそこの娘を妻にして御子を、何人も妻と御子がいる、カタカナのややこしい名前がどんどん続く。ただ、古事記の物語の後程に出てくる人物もいるらしい。

◎二代：カムヌナカハミミ 四十あまり五歳（よそとせあまり いつとせ）

◎三代：シキツヒコタマテミ 四十あまり九歳

◎四代：オホヤマトヒコスキトモ 四十あまり五歳

◎五代：ミマツヒコカエシネ 九十あまり三歳

◎六代：オホヤマトタラシヒコクニオシヒト 百あまり二十あまり三歳

◎七代：オホヤマトネコヒコフトニ 百あまり六歳

◎八代：オホヤマトネコヒコクニクル 五十あまり三歳

◎九代：ワカヤマトネコヒコオホビビ 六十あまり三歳

◎十代：ミマキイリヒコイニエは師木の水垣の宮に坐して、天の下を治めたもうた。

この大君も同じように、何人かの妻と御子たちの話が續く、御子は計十あまり二柱である。娘のトヨスキヨリヒメは、伊勢の大神の宮を齋き祭りたもうた方。御子、ヤマトヒコの葬りの折に、はじめて御陵に人垣を立てたというので知られている。

◎伊勢の大神の宮を齋き祭りたもうた方：伊勢齋宮のこと。伊勢神宮には、皇室の祖先神アマテラスが祀られている。その皇祖神のアマテラスに奉仕するのが伊勢齋宮である。歴代天皇の未婚の皇女または妹から選ばれた。古代の皇女は皇子以外とは結婚できなかったため、ほとんどが未婚、国家の最高巫女として神に奉仕する。伊勢齋宮は、高貴な血筋を持つ未婚の女性であるため、説話や物語の中で、悲劇のヒロインになることが多い。伊勢齋宮の制度は、1300年後醍醐天皇のころに制度が廃絶した。その間60人余りの齋王の名が残されている。伊勢物語や源氏物語の中に出てくるらしいが、王朝文学は無知故、オレは語れない。

◎御陵に人垣を立てた：人垣やら歌垣やら簡単に読んでいたが、これは大変。人垣とは人柱なり。

古事記では語られていないが日本書紀によると、ヤマトヒコの葬儀の際に、近習の者を生きたまま墓のまわりに埋め立て、何日も死なずに泣き叫び、死んだ後には腐った死体を犬や鳥が喰うという悲惨な情景になったと語られている。それを見た天皇は、バスヒメの葬儀の際、ノミノスクネの建言を受け入れ、赤土で人型を作って墓のまわりに立てたという。

◎三国志の魏志倭人伝には、「卑弥呼持って死す。塚を大きく作る。径百余歩 150M。殉葬者は奴婢百余人」

殉死とはいえ、どんな形で埋めたのかいろいろ想像するが、多分やったのだろうなと想像する。

◎世間では、“邪馬台国”“卑弥呼”の話はにぎにぎしい。先生は「やまたいこく ではなく やまと である」とおっしゃる。